

NPO「人と道研究会」
代表理事
松本順子
Junko Matsumoto



国土考察の『ハンミョウ』を志して —人々の『多様な心性』を汲み取るとは—

絶滅危惧種カワラハンミョウも、受難の歴史を新たに刻みました。

赤、青、緑の極彩色の、日本で最も美しいとされる甲虫ハンミョウ科で、岩手県釜石市の海岸にも生息していました。この小さな命も、約二万人が死亡・行方不明となった東日本大震災の大津波の例外ではありませんでした。

人が近づくと、ちよつと飛んではすぐ先で止まる。これを繰り返すハンミョウは、まるで人に道を教えるために飛んでいるように見え、別名「道教え」という名で有名です。

『道21世紀新聞(ルートプレス)』は、NPO

や林を抱える漁業者は多く、放置していた森林に手を入れて間伐材で作った薪を売る。「自伐林業」と呼び、名付けて「復活の薪」です。

岩手県も後押しし、自伐林業を推進する高知のNPOの指導で研修会が開かれ、その夜のミーティングでは漁師が「自分たちの手で『未来を拓く』ことに真の復興がある」。

後日、吉里吉里の漁師からメールが届きました。『津波の前の吉里吉里の海よりも、もつと豊かな三陸の海を、孫子の代まで継続させながらつくり育て、守っていききたいです。そのことが、津波で犠牲になられた方々に笑われたい、恥ずかしくない、私たち被災者の生き方だと信じます』。自然と折り合って生きる災害常襲国の「民の覚悟」に心が熱くなりました。

東日本大震災では、地域住民同士、地域と政府、産業界と地域などのコミュニケーションの重要性が指摘されました。道21世紀新聞は「小さな小さな架け橋役」ですが、脆弱な国土に生活する日本人が過酷な試練を乗り越えよう、未来へ生き抜こうとするときに、人々の「多様な心根」に寄り添い、読者に伝え、ささやかながら、お力になればと願っています。

※

「人と道研究会」が全国の「道の駅」(国土交通省登録九百七十七駅)で原則隔月に無料配布しているタブロイド新聞です。国土保全や防災、人と道の関わり、緑化や環境、地域連携や観光など幅広いテーマで33号を重ねてきました。道路利用者や地域住民、道路交通に関わる行政、事業者、企業などの対話・交流・連携で心の通うコミュニケーション促進が目的です。

二〇〇四年の新潟県中越地震で「道の駅」が防災拠点の役割を担い、被災者や道路利用者に情報を提供し、臨時避難所や自衛隊などの前線基地になっていました。それを目の当たりにし

道21世紀新聞の「読者の声」やアンケートなどには、毎号一千〜二千通の投稿があります。累計八万通を超えます。

『震災は、この世のものとは思えないくらいに体験でしたが、(第32号で)先祖先人が乗り越えてきた戦災、風水害、震災など幾多の困難があったことをかみしめることができました。平成の時代の地震、津波、原発の同時災害を乗り越えることで未来の日本人に「引き継ぐ力」を伝えたいと改めて思い直しました。「道の駅」が心の安らぎと勇気を与えてくれました。感謝』

(茨城県日立市 パート職員・六十四歳)

『道21世紀新聞を入手できてラッキー。今一番知りたいことが全部読むことができ、それに日本と外国とを比べてあり、学校でこんなことを教えてくれたことないよ！いま初めて日本という国土はリスクだらけだと思いました。「住めば都」と思い、この土地、国、地域、住人たちを愛して日本人としてしっかりと大地に足をつけ、千年桜に負けず、生きていきましょう』

(群馬県安中市 会社員女性・三十九歳)

お便りの一通一通が身にしみえます。本当にありがたく存じます。情報発信が、人々の単なる考える素材に止まらず、読者の心を動かし、読

てその実態を伝え、国土について再考してもらえればとの思いが発行の契機でした。

道21世紀新聞は、いわば国土考察の「ハンミョウの志」を背負いたいと思っただけからです。

※

東日本大震災から三カ月後の六月のこと、私は岩手県大槌町吉里吉里地区を取材で訪ねました。ガレキの山の被災地にたたくずみ、改めて日本人が負った過酷な現実と試練に、心底、魂が震えました。沿岸漁業者は仕事を奪われ、国などの支援を待つだけでは前に進めません。着目したのが「海の恋人の森」でした。後背地に森

者を行動に移す契機になっています。

第33号で掲載した札幌の小学校長の寄稿「社会科教育で国土をもっと教えよう」について、読者がネットのブログで『国土の特徴を考慮した土木や建築が行われていることを小学生のうちから勉強することは、イノベーションにつながるかもしれない』とも記す。東日本大震災の伝承に原点の「国土教育」は欠かせません。

※

東日本大震災で国の将来像をどう描くのか。再生・復興へ世界に冠たる技術力や総合力、そして日本の真価が今問われています。その際、「国家と個」の観点から埋没しがちな人々の喜怒哀楽の「多様な心性」も汲み取ることが欠かせません。そこで新たな国造り、国土の未来の姿、日本人の進化が見えてくると思います。

六月中旬、東京ドームでロック歌手・氷室京介さんの復興支援チャリティーライブに二日間で十一万人が詰めかけ、六億六千九百万円の寄付につながって、震災で書き下ろした「I F YOU WANT」も会場を包みました。

『道なき未知を進め コンパスは My Soul』

道21世紀新聞も人々の「心の羅針盤」を支えるに未知なる道を共に築きたいと思っています。